

第 29 回日本農業研究所賞の受賞者 3 件の決定について（公表資料）

令和 2 年 3 月 27 日

公益財団法人日本農業研究所の第 29 回日本農業研究所賞の受賞者 3 件は、下記のとおり決定しましたので、選考委員による業績紹介資料を添付のうえ公表します。

日本農業研究所賞受賞候補者選考委員会委員長 西尾 敏彦

公益財団法人 日本農業研究所理事長 田家 邦明

記

受賞者
(五十音順)

研究業績の題名

いた ばし ひさ お
板 橋 久 雄：ウシの第一胃内微生物消化特性の解明とその酪農技術への応用

おお つぼ けん いち
大 坪 研 一：米の品種判別および加工利用技術の開発

た むら とし き
田 村 俊 樹
：遺伝子組換えカイコの作出とその産業利用の技術的基盤の確立

せ づつ ひで き
瀬 筒 秀 樹

いた ばし ひさ お
板 橋 久 雄 (年齢 78 歳) (昭和 16 年 11 月 20 日生)

(略歴) 昭和 39 年 3 月 東京農工大学農学部農学科卒業
昭和 42 年 3 月 東京大学大学院農学系研究科修士課程修了
昭和 45 年 3 月 東京大学大学院農学系研究科博士課程修了(農学博士取得)
昭和 45 年 4 月 日本学術振興会奨励研究員
昭和 47 年 4 月 東北大学大学院研究員
昭和 47 年 7 月 農林省東北農業試験場畜産部研究員
昭和 52 年 9 月 農林省畜産試験場生理部研究員
昭和 53 年 4 月 農林省畜産試験場生理部主任研究員
昭和 54 年 4 月 農林水産省畜産試験場生理部生理第 4 研究室長
昭和 58 年 9 月 英国ロエット研究所留学
平成 4 年 3 月 農林水産省畜産試験場生理部長
平成 7 年 10 月 東京農工大学農学部生物生産学科教授
平成 19 年 4 月 東京農工大学名誉教授
平成 19 年 4 月 日本獣医生命科学大学応用生命科学部客員教授
平成 19 年 4 月 全国酪農業協同組合連合会技術顧問
平成 26 年 6 月 一般社団法人日本科学飼料協会理事長
平成 30 年 6 月 一般社団法人日本科学飼料協会顧問

研究業績の題名

ウシの第一胃内微生物消化特性の解明とその酪農技術への応用

業績紹介

ウシなどの反芻家畜では、採食した飼料はまず第一胃（ルーメン）に生息する微生物の働きによる発酵で飼料成分が消化され、発酵産物を介して乳や肉が生産される。しかしルーメン内微生物の役割をはじめその機構には未解明な部分が多く残されており、ウシの生産性を向上させるためにはそれらの解明が重要である。

板橋久雄氏はルーメン内に細菌と共に多数生息する原生動物（プロトゾア）に着目し、飼料の消化におけるプロトゾアの役割を解明する研究に早くから取り組んだ。

板橋氏は、まずウシなどを用いた動物試験により、プロトゾアはルーメン発酵を活性化させて飼料中の繊維成分などの消化性を改善するとともに、採食量を増加させ、ウシの健康、発育の向上に寄与することを明らかにした。また、プロトゾアにはルーメン内の細菌叢や pH などを安定的に維持し、疾病を防止するとともに、ルーメン内の抗酸化能を高めるなど、多くの優れた機能を発揮していることを解明した。さらに、プロトゾアは独自の繊維分解酵素を持つことをはじめて明らかにした。加えて、プロトゾアの細胞は良質なタンパク質や抗がん作用などがある共役リノール酸などの機能性物質を多く蓄え、これらが消化吸収されて乳成分に移行し、良質な牛乳の生産に寄与することも明らかにした。このように、乳牛、肉牛の生産性を維持・向上させるためには適切なプロトゾア群を維持する飼料給与が肝要であることを示した。

さらに板橋氏は、温室効果ガスの一つであるメタンがルーメン発酵からも産生されることから、その削減研究にも早い時期から着手した。各種の有機酸、イオノフォア、酵母などを飼料に添加することで、メタン菌が制御され、生産性を損なうことなくメタン排出を低減できることを示した。メタン

産生削減については、その後他機関でも研究が広まり、行政とも一体となって、国レベルでの低減目標の達成に向けた多くの取り組みが行われている。

これらルーメン発酵の機能解明とそれに基づく技術開発の成果は、公立畜産研究機関などによる共同研究に生かされるとともに、「日本飼養標準・乳牛」にも反映され、乳牛飼養技術の発展に貢献している。

(松川 正選考委員記)

過去に受けた主な賞

平成 18 年 日本畜産学会功労賞(西川賞) (第 9 号)

平成 18 年 Animal Science Journal Excellent Paper Award (No.1)

平成 24 年 Animal Science Journal Excellent Paper Award (No.20)

おお つぼ けん いち
大 坪 研 一 (年齢 69 歳) (昭和 26 年 1 月 9 日生)

(略歴) 昭和 49 年 3 月 東京大学理学部卒業
昭和 49 年 4 月 鐘紡入社、中央研究所配属
昭和 56 年 4 月 農林水産省食品総合研究所に入所
平成 元年 3 月 学位取得 (東北大学農学博士)
平成 2 年 4 月 農林水産省北陸農業試験場米品質評価研究室長
平成 5 年 4 月 食品総合研究所穀類特性研究室長
平成 16 年 4 月 お茶の水女子大学大学院客員教授併任
平成 17 年 4 月 独立行政法人食品総合研究所食品素材部長
平成 18 年 4 月 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所
食品素材科学研究領域長
平成 20 年 4 月 新潟大学大学院自然科学研究科教授
平成 28 年 4 月 新潟薬科大学応用生命科学部応用生命科学科教授
令和 元年 4 月 新潟薬科大学応用生命科学部特任教授

研究業績の題名

米の品種判別および加工利用技術の開発

業績紹介

大坪氏は日本人の主食である米の品質評価、加工利用に関する研究を通じて、その適正な流通や用途拡大に多大な貢献をなした。特に、DNA を指標とする品種判別技術は、画期的手法として特筆される。従来、米の品種判別には稲の草型や米の粒形、酵素や遺伝子の多型などを用いる方法が知られていたが、精米や米飯などには適用できない、ばらつきが多いなどの問題があった。そこで氏は DNA 分析で汎用される PCR 法に着目し、まず数千に及ぶ市販のランダムプライマーから判別に適用可能な数十個のプライマーを選抜した。次に誤判別を引き起こす DNA バンドの出現を防止するため、増幅 DNA 断片から品種識別性の高い断片を抽出し、その塩基配列から新たなプライマーを設計した。それらプライマーの最適な組み合わせにより、DNA の電気泳動バンドパターンから国内生産高上位 10 品種の判別法を確立した。この技術は簡便で精度が高いことから、栽培面積が最も多い「コシヒカリの判別キット」として市販されるに至った。元来精米を対象とする技術であったが、炊飯した米 (米飯) や、一部産地判別にも適用可能な手法として発展させた。米飯では加熱による DNA の分解、デンプンの糊化とタンパク質の変性のため抽出が困難であるが、酵素処理と DNA 抽出法の改良によってこの難問を解決した。また、一般に PCR 法は産地の判別には不適であるが、いもち病抵抗性の新潟県産コシヒカリにつき、抵抗性遺伝子の特異な配列を解析してプライマーを設計し、同県産であることを証明する産地判別法を開発した。これらの判別技術は現在、育種段階での品種の確認、種子の保存や配布における品種の保証、流通段階での不正混米の検出、炊飯米や加工米飯など消費段階での品種の確認など、多方面において欠かせない手法となっている。

また、氏は米の加工利用技術の開発にも意欲的に取り組み、民間企業や育種研究グループとの共同で低アミロース米を利用した膨化玄米を開発し、「玄米雑炊」として市販にこぎ着けている。他にも、「自然解凍用冷凍ずし」の開発や日印交雑品種「華麗舞」のカレーライスへの利用など、育種研究グループの開発した低アミロース新形質米を、独自の着眼点から新しい加工食品原料としての道を拓き、

米の用途拡大を図ってきた。

現在も、「糖尿病・認知症複合予防機能を有する米加工品開発を目指すプロジェクト」の研究代表者を務めるとともに、米国、中国との共同研究を実施している。また、日本水稲品質・食味研究会の副会長、DNA鑑定学会理事、メディカルライス協会の副理事長を務めるなど、米の利用拡大に向けて幅広く活躍している。

(春見隆文選考委員記)

過去に受けた主な賞

- 平成 7 年 日本食品科学工学会奨励賞「米などイネ科穀物の成分・特性の評価手法及び適正利用技術に関する研究」
- 平成 16 年 日本食品科学工学会技術賞「PCR 法による米の DNA 判別のためのプライマーセットの開発」
- 平成 19 年 飯島藤十郎記念技術賞「PCR 法による米の DNA 判別技術の開発」
- 平成 20 年 日本醸造協会技術賞「醸造酒を試料として原料植物・品種を判別する技術の開発」
- 平成 25 年 日本応用糖質科学会学会賞「米の品質評価、品種判別および加工利用に関する研究」
- 平成 25 年 新潟日報文化賞（産業技術部門）

た むら とし き
田 村 俊 樹 (年齢 71 歳) (昭和 23 年 9 月 2 日生)

(略歴) 昭和 46 年 3 月 京都工芸繊維大学繊維学部養蚕学科卒業
昭和 46 年 4 月 農林省蚕糸試験場九州支場品種改良研究室入省
昭和 47 年 3 月 農林省蚕糸試験場企画連絡室研究員
昭和 48 年 3 月 農林省蚕糸試験場生理部蚕遺伝研究室研究員
昭和 54 年 3 月 学位取得 (農学博士)
昭和 58 年 12 月 農林水産省蚕糸試験場蚕育種部蚕遺伝研究室研究員
昭和 63 年 10 月 農林水産省蚕糸・昆虫農業技術研究所遺伝育種部遺伝子工学研究室長
平成 12 年 4 月 独立行政法人農業生物資源研究所昆虫生産工学研究グループ
遺伝子工学研究チーム長
平成 17 年 4 月 独立行政法人農業生物資源研究所遺伝子組換えカイコ研究センター長
平成 20 年 4 月 独立行政法人農業生物資源研究所昆虫科学研究領域特任上級研究員
平成 27 年 4 月 一般財団法人大日本蚕糸会蚕業技術研究所研究アドバイザー

せ づつ ひで き
瀬 筒 秀 樹 (年齢 52 歳) (昭和 43 年 3 月 3 日生)

(略歴) 平成 2 年 3 月 九州大学理学部卒業
平成 8 年 9 月 九州大学大学院医学系研究科博士課程中退
平成 8 年 10 月 農林水産省蚕糸・昆虫農業技術研究所特別研究員
平成 13 年 1 月 理化学研究所研究員
平成 16 年 4 月 独立行政法人農業生物資源研究所研究員
平成 23 年 4 月 独立行政法人農業生物資源研究所ユニット長
平成 25 年 10 月 東京大学大学院新領域創成科学研究科教授 (兼任)
平成 28 年 4 月 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構
カイコ機能改変技術開発ユニット長

研究業績の題名

遺伝子組換えカイコの作出とその産業利用の技術的基盤の確立

業績紹介

田村俊樹氏は、2000 年に世界で初めて遺伝子組換えカイコの作出に成功した。田村氏の研究を引き継いだ瀬筒秀樹氏は本技術の改良・高度化を図り、産学官の連携協力を推進することで新たな産業を牽引する実用化技術へと大きく発展させた。

田村氏は、動く遺伝子と呼ばれるトランスポゾン的一种 (ピギーバック) を用いて、外来の遺伝子をカイコの染色体に導入し、後代に安定的に発現する遺伝子組換えカイコの作出技術を開発した。本技術は従来のショウジョウバエに用いられていた技術とは異なるカイコ独自の遺伝子組換え技術としてその独創性が高く評価されている。

さらに本技術の改良を進め、トランスポゾンに酵母の遺伝子発現システムを組み込むことによ

り、外来遺伝子をカイコ全体ではなく、絹糸腺や中腸等の器官特異的に発現させる技術を開発した。中でも、後部絹糸腺発現技術と中部絹糸腺発現技術は産業上極めて有益な新規タンパク質生産技術となっている。

繭糸は、後部絹糸腺で作られる繊維状タンパク質フィブロインと、中部絹糸腺で作られ、フィブロインの周りを被っている糊状タンパク質セリシンから成る。後部絹糸腺発現技術でフィブロインの性質を変えることにより、繭の糸質を改変し、緑色等の蛍光カラーシルク、超極細シルク等のこれまでにない高機能シルクを開発した。緑色蛍光シルクを作る遺伝子組換えカイコについては、2017年に世界で初めて養蚕農家での実用的な飼育が行われ、作成された緑色蛍光シルクは京都西陣などにおいてアートやインテリアへの利用が計画されている。また、繊維分野だけでなく、工業（レアアース吸着シルク）、医療（人工血管）等の分野からも新たな素材となる高機能シルクの開発、大量生産が期待されている。

一方、中部絹糸腺で作られるセリシンは水に溶けやすく、組換えタンパク質の精製が容易であることから、中部絹糸腺発現技術について発現量等の改良を進め、体外診断薬やヒト・動物医薬用の組換えタンパク質の実用的生産技術を確立した。本技術を用いて、ヒト骨粗鬆症検査薬、化粧品原料であるヒトコラーゲンなどが開発され、また、抗がん剤、牛乳房炎治療薬などが開発中である。

田村俊樹氏と瀬筒秀樹氏の研究は、基礎研究として優れているばかりでなく、実用技術へと発展させることで、古来、絹を生産する昆虫として利用されてきたカイコの利用分野を医薬品、化粧品、工業素材などの分野へ大きく広げた画期的な業績であると評価される。

（大杉 立選考委員記）

過去に受けた主な賞

田村俊樹

平成 12 年 蚕糸学賞（日本蚕糸学会）

平成 19 年 日本農学賞（日本農学会）

平成 20 年 ルイ・パスツール賞（国際養蚕委員会）

平成 20 年 貞明皇后記念蚕糸科学賞（大日本蚕糸会）

瀬筒秀樹

平成 27 年 貞明皇后記念蚕糸科学賞（大日本蚕糸会）

平成 28 年 日本育種学会賞（日本育種学会）

説明資料 1 日本農業研究所賞とは

この賞は、(公財)日本農業研究所が定款の定めるところに従い、「農業に関する学術研究上の顕著な貢献をした者」を表彰し、その研究業績が今後の農業の発展にも貢献することを期待するものである。昭和40年度が第1回目で、概ね隔年度毎に実施され、今回は第29回目に当たる(参考資料1-過去の受賞者一覧)。毎回の受賞者は、推薦による受賞候補者の中から選考決定され(3件以内)、この方には各100万円の賞金が授与される。

農業に関する学術研究は、その専門分野が多岐にわたり研究組織も多数に上ることから、本表彰事業の趣旨を幅広く適正に実現するため、受賞候補者の推薦及び選考過程につき次のような工夫を行っている。①受賞候補者の推薦について、官・民、中央・地方の農業に関する学術研究を行う大学、試験研究組織にお願いするほか、いわば研究成果の利用評価の可能な農業団体、マスコミ、行政にも広くお願いし、合計420余りの組織等に推薦を依頼している。また、推薦期間も約半年間の長期に設定している。②受賞者選考について、農業に関する学術研究の主な分野を代表する選考委員を15名委嘱し(参考資料2-委員会委員名簿)、推薦者からの業績紹介のヒアリングの機会を設け、最終的には過半数以上の選考委員が投票した者を選考する(3件以内)ことにより、特定分野に偏らないようにしている。

説明資料 2 第29回日本農業研究所賞の推薦、選考、決定経過

(1) 受賞候補者の公募

令和元年7月中旬に次のような組織、団体等に11月30日を締切期限として受賞候補者の推薦を依頼した(合計425件)。

農業等関係学会(52)、国公立大学農業等関係学部(96)、農林水産省(4)、政府関係研究機関・特殊法人(6)、国立研究開発法人等(25)、都道府県試験場(121)、民間研究機関(8)、新聞社及び雑誌社(15)、農業関係組織(35)、本賞の過去の受賞者及び選考委員(43)、日本農研役員(20)

(2) 受賞候補者選考委員会の設置と4次にわたる選考

令和元年5月28日の理事会の承認を得て選考委員を委嘱し、7月5日開催の第1回選考委員会で、委員長の互選、運営方法・進め方について協議を行い、「受賞候補者選考の進め方」を決定した。

上記(1)の締切期限までに8件の応募があり、この8件について、令和2年2月4日開催の第2回選考委員会で1件ずつ推薦者等から業績紹介を受けた。

2月17日開催の第3回選考委員会で、受賞候補者の業績について意見交換を行ったうえで、選考委員に3件連記の投票を依頼し、3月10日開催の第4回選考委員会において開票後、過半数以上の投票を得た3件の最終受賞候補者が決定された。

(3) 受賞者の決定

3月13日の理事会において、選考委員会の「日本農業研究所賞受賞候補者選考の経過報告」に基づき受賞者3件を決定した。

なお、5月11日(月)11時より、表彰式をホテル・ルポール麴町において行う予定である。

日本農業研究所賞受賞者一覧（第1回～29回）

第1回（昭和40年度）

大槻正男：農家の経済構造ならびに経済活動に関する研究

第2回（昭和41年度）

石塚喜明

（共同研究）：作物、特に水稻の栄養生理に関する研究

田中明

第3回（昭和42年度）

西川義正：家畜の繁殖ならびに人工授精に関する研究

第4回（昭和43年度）

田島弥太郎：蚕の放射線遺伝学的研究とその応用

第5回（昭和46年度）

上坂章次：和牛の生産能力に関する基礎的ならびに応用的研究

定盛昌助：リンゴの優良品種ふじの育成に関する研究

松島省三：水稻収量の成立理論とその応用に関する研究

第6回（昭和48年度）

有馬啓：Mucor Rennin の発見と研究

笠原安夫：耕地雑草およびその防除に関する研究

高橋治助：アジアにおける水稻の栄養生理的解析による多収技術の確立

第7回（昭和50年度）

嵐嘉一：水稻栽培技術体系の暖地的展開とその史的考証

近藤康男：日本農業の経済学的研究

細田達雄：家畜の血液型とその応用に関する研究

第8回（昭和52年度）

大森常良：牛の急性ウイルス病の防圧に関する研究

加用信文：わが国における農業経済統計の確立

福井重郎：ダイズの生理・生態学的並びに育種学的研究

第9回（昭和54年度）

川田信一郎：わが国における作物栽培の実態解明に関する研究

丹羽太左衛門：豚の繁殖と改良技術に関する研究

福田紀文

：蚕の人工飼料の開発と実用化に関する研究

伊藤智夫

第10回（昭和56年度）

- 石 沢 修 一：本邦農地土壌の微生物学的研究
弥 富 喜 三：害虫の生物学的及び化学的防除に関する研究
野 村 吉 利：ニューカッスル病に対する新免疫方法（L-K法）の開発

第11回（昭和58年度）

- 石 墨 慶一郎：水稻の良質多収品種の育成
西 野 操：柑橘害虫ヤノネカイガラムシの発生予察ならびに生物的防除の研究
山 田 芳 雄：放射化分析およびアイソトープトレーサ法の植物栄養・土壌肥料研究への応用

第12回（昭和60年度）

- 江 崎 春 雄：穀類収穫機の開発に関する研究
西 貞 夫：組織培養の利用による野菜・花き育種技術の開発
古 島 敏 雄：日本農業史の研究

第13回（昭和62年度）

- 坂 井 健 吉：高でんぷん超多収甘藷品種の選抜法の開発および新品種の育成
杉 江 侑 一：家畜の胚（受精卵）移植に関する技術開発研究
中 川 昭一郎：水田の用排水と圃場整備に関する研究

第14回（平成元年度）

- 大 島 信 行：弱毒ウイルス利用による植物ウイルス病の防除
梶 井 功 一：戦後日本の農業経済・農業経営の発展・変化にかんする研究
小 林 勝 利：蚕の内分泌学的研究とその応用

第15回（平成3年度）

- 阿 部 猛 夫：豚の系統造成法に関する研究とその実際的応用
玉 木 佳 男：性フェロモンによる害虫防除に関する研究
増 田 澄 夫：二条大麦（ビール麦）及び六条大麦優良品種の育成

第16回（平成5年度）

- 飯 沼 二 郎：農業近代化の理論的・実証的研究
稲 葉 右 二：各種牛ウイルス病の防除技術の開発及び実用化に関する研究
本 多 藤 雄：促成栽培用イチゴの栽培技術の開発と“はるのか”“とよのか”等優良品種の育成

第17回（平成7年度）

- 岡 田 吉 美：わが国の植物DNA研究における先駆的研究ならびに指導的活動
西 山 壽 一：暖地における水稻優良品種の育成
早 瀬 達 郎
栗 原 淳 一：環境にやさしい肥効調節型肥料の開発および施肥技術の確立

第18回（平成9年度）

- 入谷 明：家畜の繁殖ならびに体外受精に関する研究
江塚 昭典：イネの主要病害に対する品種抵抗性の先駆的研究とその利用技術の開発
川嶋 良一：農業技術研究の推進方策に関する論考

第19回（平成11年度）

- 石橋 晃：家禽のアミノ酸要求量に関する研究
内嶋 善兵衛：農業生産における気候資源の利用技術の開発
貝沼 圭二：澱粉の高度利用化技術の開発に関する研究

第20回（平成13年度）

- 尾関 幸男
：チホクコムギなど良質多収秋まき小麦品種の育成
佐々木 宏
駒田 且：フザリウム菌選択培地の創製とその応用によるフザリウム病の生態ならびに防除に関する研究
清水 悠紀臣：豚ウイルス病の防除法、特に生ワクチン開発に関わる基盤技術の確立

第21回（平成15年度）

- 市川 友彦
：大型汎用コンバイン並びに超小型自脱コンバインの開発
杉山 隆夫
岸本 良一：ウンカ類の海外長距離飛来の実証と防除技術の確立
真鍋 勝：食品のマイコトキシン汚染の解明と防除

第22回（平成17年度）

- 春見 隆文：微生物・酵素を利用した新規糖質甘味料の製造技術
西浦 昌男：カンキツ類の珠心胚利用及び交雑による新品種の育成
花田 章：未成熟卵子を利用した反すう家畜の体外受精技術の開発

第23回（平成19年度）

- 祖田 修：農学原論の確立
三輪 睿太郎：食料供給に伴う窒素の動態と環境影響のシステム解析
森 肇：カイコ多角体病ウイルスの構造解析と機能利用に関する研究

第24回（平成21年度）

- 佐伯 尚美：米流通・米政策学と農協論の確立及び戦後日本農業政策に関する研究
土屋 七郎
：リンゴわい性台木の先駆的研究と JM 台木シリーズの育成
羽生田 忠敬
古谷 修：豚における栄養価評価法の開発とその応用

第25回（平成23年度）

- 阿部 亮：家畜飼料の栄養価評価法の確立と低・未利用資源の開発利用に関する研究
西尾 敏彦：新しい視点に立った我が国の農業技術史に関する研究
守山 弘：農村の二次的自然による生物多様性保全機能の解明と成果の普及

第26回（平成25年度）

- 荏開津 典生：転換期の農業・食料問題及び政策形成に関する研究
岡田 齊夫：天敵微生物を用いた生態系調和型害虫防除法の研究
角田 幸雄：胚の顕微操作による新しい家畜改良技術の構築

第27回（平成27年度）

- 太田原 高昭：北海道農業の振興に果たす農協の役割に関する研究
堀江 武：水稻の生育予測モデルの開発とアジア稲作の地球温暖化影響に関する研究
陽 捷行：農耕地から発生する温室効果微量ガスの評価と削減技術の開発・普及

第28回（平成29年度）

- 岩崎 和巳：農業用水路系の水理設計法に関する研究
岩元 睦夫：食品の流通技術の改善・開発及び体系化に関する流通工学的研究
中村 保典：イネ澱粉生合成過程の解明及び成果の農業への活用

第29回（令和元年度）

- 板橋 久雄：ウシの第一胃内微生物消化特性の解明とその酪農技術への応用
大坪 研一：米の品種判別および加工利用技術の開発
田村 俊樹
：遺伝子組換えカイコの作出とその産業利用の技術的基盤の確立
瀬筒 秀樹

（受賞者氏名は五十音順）

第29回（令和元年度）日本農業研究所賞受賞候補者選考委員会委員名簿
（五十音順、敬称略）

- 大 杉 立（東京農業大学客員教授）
- 小 川 奎（（公財）日本植物調節剤研究協会顧問）
- 小 澤 健 二（（公財）日本農業研究所客員研究員）
- 春 見 隆 文（（一財）日本醤油技術センター理事長）
- 岸 康 彦（元（公財）日本農業研究所研究員）
- 古 在 豊 樹（千葉大学名誉教授）
- 佐々木 義 之（京都大学名誉教授）
- 佐 藤 洋 平（東京大学名誉教授）
- 鈴 木 昭 憲（東京大学名誉教授）
- 染 英 昭（穀物乾燥貯蔵施設協会理事長）
- 西 尾 敏 彦（（公社）大日本農会顧問）
- 堀 江 武（元農業・食品産業技術総合研究機構理事長）
- 松 川 正（元畜産試験場長）
- 三 輪 睿太郎（元日本農学会会長）
- 八 木 宏 典（（公財）日本農業研究所客員研究員）

以上 計15名

注：肩書は委員就任時のものとしています。